

イングリッシュ・ローズを作りこなすバラ職人 ～緻密な技術でバラ愛好家の心を掴む～

一宮市 三輪 真太郎 さん(MIWA ROSE FACTORY)
施設花き (バラ)

【平成 25 年 11 月 14 日掲載】

一宮市で切り花用のイングリッシュ・ローズを中心に、特徴あるバラを栽培する「MIWA ROSE FACTORY」の三輪真太郎さんを紹介합니다。バラ業界では高度な栽培技術を持つことで知られる三輪さんは、平成 25 年度 より愛知県花き温室園芸組合連合会バラ部会の部会長としてバラの生産振興にも尽力されています。

両親のために何ができるのか

バラ栽培を始めたのは、真太郎さんが「バラに心酔しきっている」と形容する父親の栄一さんでした。栄一さんは、学生の頃、通学路沿いの洋館に咲き誇る真っ白なバラに魅せられて以来、趣味としてバラ栽培を楽しんでいましたが、真太郎さんが3歳だった昭和42年に12年間勤めた会社を辞め、本格的なバラ栽培を開始します。

真太郎さん自身は、父親とは異なり、バラに対して特段、愛着もなかったため農業を継ぐ気はありませんでした。その為、高校卒業後は、サラリーマンとして働いていました。しかし、20歳の成人式に同世代の友人たちが親への感謝を口にする姿をみて、「苦勞して自分を育ててくれた両親のために何ができるのか」と考え、父親が一代で築いたバラ園への就農を決意します。



三輪 真太郎さん

イングリッシュ・ローズの導入

滋賀県のバラ生産者のもとで研修を終えた真太郎さんは、昭和60年に就農しました。バブル経済にむかっていた当時、バラは作った端から売れるような状況で、高級車で農地に乗りつける生産者も少なくなかったそうです。しかし、そのような状況も長くは続かず、販売価格は徐々に低下します。特に元号が平成に変わってからは、輸入切り花の流通量が増加したこともあり、下落幅はさらに大きくなり、バラ生産者の多くが苦境に立たされることになります。



香りの高いイングリッシュ
ローズ ‘シンペリン’

花き卸売会社から「(ガーデン用の)イングリッシュ・ローズを切り花用に栽培してみないか」と声がかかったのは、ちょうどその頃でした。経営規模が特別大きかったわけでもなく、「このまま一般的に流通する品種を作っても未来はない。」と考えていた真太郎さんは、繊細で美しい花形と強い香りを持つイングリッシュ・ローズにバラ園の未来を託すことにしました。

高度な環境制御技術

実際に栽培してみると、原種に近いイングリッシュ・ローズはトゲが多いうえ、繊細で薄い花弁は、ボトリチス病（灰色カビ病）などの病気に弱く、湿度の急激な変化で‘花じみ’ができやすいため、栽培初年度の商品化率は非常に低いものでした。

それでも真太郎さんは、ハウス内の換気方法や培地の見直しなど試行錯誤を重ね、少しずつ商品化率を向上させました。また、平成19年には、より細かい温湿度管理を可能にするためヒートポンプと除湿機を導入します。これにより最適な湿度管理と暖房費の大幅な節約が可能となり、収益性は大幅に改善しました。さらに、近年の異常高温に対応するため、県内のバラ生産者では初となるドライミストを導入し、施設内環境の改善に努めています。



稼動中のドライミスト

これらの高い技術力とバラ栽培にかける熱意が、イングリッシュ・ローズ生みの親であるデビッド・オースチン社にも伝わり、切り花専用品種のライセンス契約（国内では2つのd経営体のみ）に繋がっています。



MIWA ROSE FACTORY
オリジナル品種
‘ブル・ドゥ・パルファム’

東京への進出

徐々に満足いくものが生産できるようになった真太郎さんでしたが、父親から経営を継承した平成12年当時、取引市場は中京圏が中心で、イングリッシュ・ローズに対する認知度も低く、販売価格も正しく評価されたものとは言い難いものでした。

そこで、バラの愛好家が多く、イングリッシュ・ローズの需要が高かった東京への出荷を開始します。ただ、全国から商品が集まる東京では、普通に商品を出荷するだけでは、その他大勢に埋没してしまうと考え、自ら営業に出たそうです。栽培の合間のわずかな時間を利用して東京に出かけ、仲卸や小売店を回る忙しい日々が続いたそうです。こうした地道な営業努力と出荷物の品質の高さにより、現在では、市場出荷物のほぼ全量が予約相対で取引され、通常のバラよりも高い販売価格で取引されています。

これからの生産者に求められる資質

最後に若手生産者に必要な資質を尋ねたところ、「こだわりと誇りだけでは、この時代に通用しない。+αとして経営感覚が絶対に必要。自分の商品がお客様に必要とされているか判断できる力と、コンプライアンス（法令遵守）を重視して取引先・種苗会社から揺るぎない信頼を得ることが必要。」と栄一さんのバラ栽培に対するこだわりを引き継ぎながらも、経営面での新たな顧客獲得に務めてきた真太郎さんならではの意見を語ってくれました。



トゲの多いイングリッシュ・ローズの収穫は、特に注意が必要

執筆：農業経営課
取材協力：尾張農林水産事務所農業改良普及課